

# 反重力 Antigravity

芸術

時空旅行

— パラレルワールド



プレスリリース 豊田市美術館

## 豊田市美術館

2013年9月14日(土) - 12月24日(火)

主催：豊田市美術館、テレビ朝日、メ〜テレ

共催：朝日新聞社

後援：アルゼンチン共和国大使館

協力：NECディスプレイソリューションズ、ステラ株式会社、有限会社落合製作所

特別連携：あいちトリエンナーレ実行委員会

メンバーシップ：トヨタ自動車株式会社

休館日：月曜日 \*9月16日、9月23日、10月14日、11月4日、12月23日は開館

開館時間：午前10時 - 午後5時30分(入場は5時まで)

\*10月12日、10月13日、10月14日は午後8時まで開館

会場：豊田市美術館

観覧料：一般1,000円(800円) / 高校・大学生800円(600円) / 中学生以下無料  
( )内は前売券及び20名以上の団体料金 / 市内高校生、障がい者及び市内75歳  
以上は無料(要証明)

「あいちトリエンナーレ2013」国際美術展チケットをご持参いただければ、当日の企画  
展観覧料を100円割引します(1回限り)。ただし他の割引との併用はできません。  
前売券：豊田市美術館、チケットぴあ[Pコード:765-833] 9月13日(金)まで発売

お問い合わせ：豊田市美術館 展覧会担当 / 能勢陽子、北川智昭、鈴木俊晴

〒471-0034 愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1

Tel. 0565-34-6610 Fax. 0565-31-4983

http://www.museum.toyota.aichi.jp bijutsukan@city.toyota.aichi.jp



Toyota  
Municipal  
Museum  
of Art

豊田市美術館



[出品作家] (出品作家数: 16名 / 約25点)

レアンドロ・エルリッヒ

平川紀道

カーステン・ヘラー

河原温

ジルヴィナス・ケンピナス

クワクポリョウタ

松澤宥

毛利武士郎

内藤礼

中原浩大 + 井上明彦

中村竜治

中谷美二子

エルネスト・ネト

奥村雄樹

佐藤克久

やくしまるえつこ

Leandro ERLICH

Norimichi HIRAKAWA

Carsten HÖLLER

On KAWARA

Zilvinas KEMPINAS

Ryota KUWAKUBO

Yutaka MATSUZAWA

Bushiro MOHRI

Rei NAITO

Kodai NAKAHARA + Akihiko INOUE

Ryuji NAKAMURA

Fujiko NAKAYA

Ernesto NETO

Yuki OKUMURA

Katsuhisa SATO

Etsuko YAKUSHIMARU

## [ 展覧会概要 ]

反重力とは、創成時の宇宙にインフレーションを起こし、今日の宇宙を加速膨張させているともいわれる、重力に反する仮説の力です。SF作品では、宇宙飛行やテレポーテーション、空中都市の原理として、物質・物体に関わる重力を無効にし、調節する架空の技術として登場します。加速度的に非物質化していく現在の社会を反映し、私たちの身体や生活を規定してきた枠から逃れるものとして、「反重力」という言葉を掲げます。本展では、身体から解放されるような軽やかな空間性を感受し、世界を巨視的な視点で眺めて地上の価値観から離れ、宇宙的な視野を持つことを目指します。空中都市や宇宙飛行は、はるか昔から人間のユートピアに対する憧憬を誘ってきました。これまで人間の生活の基盤となっていたものから離れるとき、それは希望に向かうのでしょうか、それとも絶望に繋がるのでしょうか。「反重力」について考えることは、現代のユートピア観を考えることにもなるでしょう。

## [ 展覧会の見どころ ]

### ● あいちトリエンナーレ2013特別連携事業

本展は、「あいちトリエンナーレ2013 揺れる大地 われわれはどこに立っているのか 場所、記憶、そして復活」との特別連携事業です。2011年の東日本大震災以後を強く意識したあいちトリエンナーレの「揺れる大地」に対し、本展は「反重力」という言葉を掲げて、人間が大地から離れるとしたら、また人間の生活を支える基盤が壊れたとしたらということを行います。どちらも、重要なターニングポイントを向かえた現在における人間について考えることに繋がるでしょう。

### ● 宇宙的な視座の提示

人間の身体や生活は重力によって支えられていますが、もし重力から解放されるとしたら、私たちの意識はどのように変わるでしょうか。本展は、通常の思考パターンや身体感覚に囚われない視座を模索します。身体によって自己規定されない「私」や、遥か宇宙の果てから地上を眺める視点など、ふわりと宙に浮かぶ心地よさから、長大な時空間における瞑想的な感覚まで、宇宙における人間ということについて考えます。

### ● 重力からの解放を体感させる作品

会場では、磁気テープが宙に浮かんだまま回転し続けるジルヴィナス・ケンピナスの作品、来場者が建物の表面に浮かんでいるように見えるレアンドロ・エルリッヒの新作、霧の中に身を置くと空間に溶けていきそうに感じられる中谷芙二子のインスタレーションなど、重力から解放されるような身体感覚を味わう作品を紹介します。浮遊感や解放感を、驚きや新鮮さとともに味わってください。

### ● 建築、音楽に跨る多彩なジャンルと作家

本展には、1920年代から80年代生まれの幅広い世代、国籍に属する作家達が参加します。美術作家に加えて、建築家の中村竜治や音楽家のやくしまるえつこなど、多彩なジャンルで活躍する作家たちも含まれます。映像、巨大なインスタレーションから、極端に物質を切り詰めたコンセプチュアルなものまで、実に多様な作品を通して、同時代の空気を感じ、かつ人間にとっての普遍的なテーマについて思いを巡らせてください。

### ● 谷口吉生の建築空間を活かした新作の展示

豊田市美術館は谷口吉生の設計による建築空間が特徴的ですが、本展では中谷芙二子が心地よい広がりを見せる2階大池の周辺に霧を発生させ、内藤礼がおよそ300m<sup>2</sup>、高さ9.6mの巨大な展示室に新作インスタレーションを行い、またレアンドロ・エルリッヒが巨大な家を展示室の中に出現させます。当館の建築空間との有機的な関わりから生まれる新作を、ぜひごらんください。

### ● 充実したイベント

展覧会会期中、物理学者の大栗博司(カリフォルニア工科大学カブリ冠教授、東京大学数物連携宇宙研究機構主任研究員)に重力についてのレクチャーを行ってもらうほか、五十嵐太郎(建築史家/あいちトリエンナーレ2013芸術監督)、青木淳(建築家/あいちトリエンナーレ出品作家)、中村竜治(建築家/本展出品作家)による鼎談「建築に反重力は可能か」、美術作家の内藤礼(美術家/本展出品作家)、榎木野衣(美術評論家)とのトーク「地上の生の光景」など、多彩なイベントを開催します。

## [ 関連イベント ]

### ● レクチャー 「重力とは何か」

大栗博司(物理学者[素粒子論]/カリフォルニア工科大学カブリ冠教授、東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構主任研究員)  
9月22日(日) 14:00-15:30

### ● 鼎談 「建築に反重力は可能か」

青木淳(建築家) × 五十嵐太郎(建築史家/あいちトリエンナーレ2013芸術監督)  
× 中村竜治(建築家/出品作家)  
10月20日(日) 14:00-16:00

### ● トーク 「地上の生の光景」

内藤礼(出品作家) × 榎木野衣(美術評論家) × 能勢陽子(当館学芸員)  
12月1日(日) 14:00-16:00

### ● 担当学芸員によるスライドレクチャー

9月23日(月・祝)、12月15日(日) いずれも15:00-16:00

### ● 映画上映会

「2001年宇宙の旅」(スタンリー・キューブリック監督、1968年、141分)  
9月28日(土) 14:00-17:00  
「惑星ソラリス」(アンドレイ・タルコフスキー監督、1972年、165分)  
11月30日(土) 14:00-17:00  
\*担当学芸員によるミニレクチャー付き。

\*いずれも美術館1階講堂(定員172人)にて。レクチャー、鼎談、アーティストトークは正午より配布する整理券と企画展観覧券の半券が必要です。

### ● 担当学芸員によるギャラリートーク

10月13日(日)、10月26日(土)、11月9日(土) 15:00-16:00

### ● 作品ガイドボランティアによるギャラリートーク

木曜日除く毎日14:00から(約1時間)、土、日、祝日は11:00と14:00から(ただし開催されない場合もあります)

\*いずれも当日の企画展観覧券が必要です。1階チケットカウンターにお集まりください。

## [ カタログ ]

### 「反重力 浮遊 | 時空旅行 | パラレル・ワールド」

青幻舎より11月上旬刊行予定

執筆者: 吉岡洋(美学芸術学/情報文化論)、能勢陽子(当館学芸員)

## [ 出品作家 ]

### レアンドロ・エルリッヒ Leandro ERLICH

1973年ブエノスアイレス(アルゼンチン)生まれ、現在同地在住

レアンドロ・エルリッヒは、あまりに日常的でもはや疑う余地のない事柄を転覆させて、現実や世界認識のあり方を問う。それも、鑑賞者の身体ごと取り込む巨大なだまし絵のような、シンプルでユーモア溢れる方法によって。プールの中で普通に過ごす人々、建物の表面に浮かんでいるようにみえる人々など、それらの作品の中で私たちの知覚は混乱し、愉快に宙吊りにされる。本展では、巨大な鏡と、紅葉で有名な観光地である豊田市足助町の伝統的建築物を用いて、そこに人が浮かんでいるようにみえる新作《豊田の家》を制作する。エルリッヒは作品に鏡を多用するが、それはパラレル・ワールドや別の「私」の存在を想起させ、そこではあたかも重力が失効したかのような感覚を得る。エルリッヒは、「サンパウロ・ビエンナーレ」(2004年)や「シンガポール・ビエンナーレ」(2008年)、「リバプール・ビエンナーレ」(2008年)、「越後妻有アートトリエンナーレ」(2006年、2012年)など、世界各地で国際展に参加し、個展を行うほか、国内では金沢21世紀美術館で恒久設置された《スイミング・プール》(2004年)を観ることができる。

### 平川紀道 Norimichi HIRAKAWA

1982年生まれ、東京在住

平川紀道は、コンピュータ・プログラムを用いた映像・音響インスタレーションやパフォーマンスを国内外で展開している。平川は、パラメーターの差によって生まれる計算結果の多様性を示して、人間には知覚できないとされる「並行世界」を暗示する。数多の運動パターンをみせる粒子の振る舞いを設計した映像は、無限に分岐する並行世界を連想させる。しかもここでは、非可逆的であるはずの粒子の動きが高速で巻き戻され、まるで宇宙の創世に立ち戻るような、畏怖と畏敬の念を覚える。2007年に多摩美術大学美術研究科修了。「Re: search」(せんだいメディアテーク、2007年)、「OPEN SPACE 2007」(NTTインターコミュニケーションセンター 2007年)などに参加のほか、第8回文化庁メディア芸術祭最優秀賞(2004年)、「アルスエレクトロニカ」で「Award of Distinction」(2008年)など、受賞多数。

### カーステン・ヘラー Carsten HÖLLER

1961年ブリュッセル(ベルギー)生まれ、現在ストックホルム在住

カーステン・ヘラーは、80年代後半から、自らが研究していた昆虫行動学を基に、人間の行動や認識をアートという場において検証する活動が続けている。作品に使われるメディアは、建築、実験装置、3Dフィルム、レクチャーなど多岐にわたるが、一貫するのはアートを通して人間の内的な心理作用を、注意深く、悪戯的に浮かび上がらせることにある。当館のコレクションであり、本展の出品作である《ネオン・エレベーター》は、光に対する人間の錯覚を利用した体験型の装置である。スウェーデンの心理学者ギュンター・ヨハンソンによれば、私たちが点滅する光を見続けた場合、目の網膜が刺激されて実際には無い光の流れを感じることもあるという。水平方向に仕込まれたネオンライトが下から上に明滅する《ネオン・エレベーター》の7枚の壁の中に立つと、自身の身体が光の中を上昇していくように感じられる。ヘラーは、作品を通して観る者に戸惑いを与え、日常の知覚の不確実性を認識させる。個展(ハンブルガーバーンホーフ、2010年)、「カーステン・ヘラー：実験」(テートモダン、2011年)のほか、国内でも「横浜トリエンナーレ」(2001年)、「越後妻有アートトリエンナーレ」(2012年)などの国際展に参加。

### 河原温 On KAWARA

29,484 days (2013年9月14日現在)

河原温は、カンヴァス上に制作当日の日付だけを描く日付絵画の連作(“Today”シリーズ)で知られる。1950年代に東京で活動を始めた河原は、50年代末から北米、中南米、ヨーロッパ各地を遍歴後、65年にニューヨークに居を定めて制作を継続してきた。日付絵画は、その翌66年に着手。当日の内に描き終えなければ破棄されるその絵画は、確かにその日作家が生きていた証となる。作品には収納箱があり、その内側に当日の新聞記事が貼られるが、それは歴史的に重要な事件のこともあれば、ただの商品広告のこともある。記事が伝える社会の様相と無機質な日付の文字は、ただ流れ、取り留めのない不可視の時間を提示するが、その日付は、確かに作家の身体と意識によって時間を掛けて描かれたものである。日付絵画は、時間というものど人間の意識の交わる深遠な問いへと導く。また本展では、各ページに500年ずつ、100万年分の年号をタイプした《100万年》も展示する。本作は、998031BCから制作の前年までを取めた「過去編」と、その翌年の1996ADから1001995ADを取めた「未来編」からなる。「過去編」の初めには「生き、そして死んだすべてのものたちのために」、「未来編」の最後には「最後の一人のために」という言葉が記されており、100万年

が種の起源と終末までの人類の時間であることがわかる。《日付絵画》と《100万年》は、途方もない時間の中の一点の生起としての人間の存在を、今ここで作品を前にしている自身の意識の中で、瞑想的に感得させる。

### ジルヴィナス・ケンピナス Zilvinas KEMPINANS

1969年ブルンゲ(リトアニア)生まれ、現在ニューヨーク在住

ジルヴィナス・ケンピナスは、主に磁気テープと風力を用いた浮力を感じさせる作品を発表している。円形や8の字型に磁気テープが浮いたまま、有機的で不確定な動きをみせつつ宙に留まる様子は、重力のバランスを失い、平衡感覚が麻痺するような感覚を与える。磁気テープの回転は、側にある扇風機の風力によるものだとすぐにはわかるが、その仕掛けの単純さが最小で最大の効果を生み、キネティックなイリュージョンを起こす。そしてその不確定なテープの動きが、展示される空間と動的で詩的な関係を結ぶのである。ケンピナスは、個展(クンストハレ・ウィーン、2007年)、「ヴェネツィア・ビエンナーレ」(2009年)のリトアニア館代表のほか、国内でも「横浜トリエンナーレ」(2011年)や「越後妻有アートトリエンナーレ」(2012年)などの国際展に参加している。

### クワクポリョウタ Ryota KUWAKUBO

1971年宇都宮生まれ、現在東京在住

クワクポリョウタは、大学で現代美術を学んだ後コンピュータのプログラマーとなり、独学で電子回路を用いた作品を制作するようになる。自らを「デバイスアーティスト」と呼び、明和電機との共作「ビットマン」(1998年)など、エレクトロニクスを使用したメディア作品を手掛けた。人間と機械の境界領域をフィールドに、ユーモアや遊び心のある様々なデバイスを制作するなか、2010年頃から鉄道模型に取り付けた光源の移動により、光と影が周囲の壁面に街のような光景を映し出すインスタレーションを展開している。それは観るものに、世界をミニチュールのように巨視的に眺め、愛でるような感覚を与える。1993年筑波大学芸術専門学群構成専攻総合造形コースを卒業。1996年同大学大学院修士課程デザイン研究科総合造形を修了。2001年国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)アート&ラボ科卒業。2003年、「デジタルガジェット6,8,9」で第7回文化庁メディア芸術祭アート部門大賞を受賞。「2010Iオープンスペース」(NTTコミュニケーションセンター、2010年)、「世界制作の方法」(国立国際美術館、2011年)ほか。

### 松澤宥 Yutaka MATSUZAWA

1922年2月2日長野生まれ、2006年長野にて歿

松澤宥は、概念芸術の創始者として欧米にもその名が知られている。1964年の深夜に、夢の中で「オブジェを消せ」という啓示を受けて以降、色や形状などの感覚を伴わず、物質的なものの媒体を必要としない、言葉のみによる芸術を展開し始めた。それはアメリカのジョセフ・コッスースがコンセプチュアル・アートを考案する一年前だったが、西洋のコンセプチュアル・アートがあくまで美術の文脈の中で定義されるのに対し、松澤の概念美術は汎世界的、宇宙的ともいえる広がり志向している。松澤は、一貫して人類に対する憂いを表明した反文明的なヴィジョンを言葉や朗読で発し続ける。2000年からは人類がこのまま二酸化炭素を排出し続ければ80年以内に滅亡するという学者の説に呼応し、「80年問題」を掲げるようになる。当館のコレクションである本展の出品作は、新聞から抜粋した宇宙や環境に関わる記事を縦横9文字ずつ、計81文字の方眼紙に収め、それを9枚並べて曼荼羅状にしたものである。最新の宇宙や科学的発見の最後に、必ず「80年以内に人類滅亡」の言葉が掲げられている。2222年まで生きると公言していた松澤が究極的に目指していたのは、消滅による広大な宇宙での偏在の可能性だったのかもしれない。

### 毛利武士郎 Bushiro MOHRI

1923年東京に生まれる、2004年富山にて歿

毛利武士郎は、1950年代に彫刻家として認められ、国内外で活動をした後、1963年から突如沈黙を守り、美術界から身を引いた。しかしその間も制作は続けており、その後美術界に戻るのは20年後、個展は実に36年後となった。1992年には東京を離れて富山県黒部市に移住し、コンピュータ内蔵の工作機で、ミクロン単位でステンレスの角柱をくりぬき、また同じものを埋め込む彫刻を制作する。その足し引きゼロといえる作業の後は、表面に大小様々な円形や細長い長方形の溝が生じる。時代の変遷を気にも留めず、孤高に制作を続けた毛利の彫刻からは、静かな圧倒感を感じる。それは、「Mr.阿からのメッセージ」や「地球への置手紙」というタイトルからも推測されるように、遙かな宇宙とわずかばかりの人間存在や営為を対比した、宇宙への捧げもののように感じられる。1943年東京美術学校卒業。「サンパウロ・ビエンナーレ」(1959年)、個展「毛利武士郎」(富山県立近代美術館、1999年)など。



## 内藤 礼 Rei NAITO

1961年広島生まれ、東京在住

内藤礼は、光や闇、風、空気の対流、水などの自然の要素や、布や糸、ビーズなど、物質的にはごくごくわずかでささやかなものを用いて、空間を豊かで静寂な生気で満たす。そこに身を置く人が、ある一定のものに導かれるのではなく、できるだけ深くそこにいられるように、作品はささやかに仕上げられる。そこでは、世界との本当は単純で、根源的な関係に気づき、ただ、いまそこにいることを感じる。しかしそれは同時に奇跡的なことであり、作品の発する「地上に存在することは、それ自体、祝福であるのか」という問いが、空間にも身体にも肯定的に沁み渡る。本展では、当館のおよそ300m<sup>2</sup>、高さ9.6mの真っ白な展示室に新作を設置する。1985年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。「第47回ヴェネツィア・ビエンナーレ」日本館代表（1997年）、「母型」（発電所美術館、2007年）、「すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している」（神奈川県立近代美術館、2009年）など、国内外の個展、グループ展に参加している。常設置作品に、《このことを》（家プロジェクト きんざ、直島、2001年）、《母型》（豊島美術館、2010年）がある。

## 中原浩大+井上明彦 Kodai NAKAHARA + Akihiko INOUE

中原浩大：1961年岡山県生まれ、京都在住

井上明彦：1955年大阪生まれ、京都在住

中原浩大は、1980年代末から90年代にかけて、トランポリン、レゴブロック、少女フィギュア、朽ちていく果物や家族のポートレート写真まで、ありとあらゆる魅惑的な素材を用いて作品を制作し、人々を驚かせ、また魅了した。そして2010年代に入ってからは、ツバメの写真やドローイング等を発表し、新たな展開をみせている。井上明彦は、ペインティングやドローイング、インスタレーション、写真、映像など、複数領域に跨る作品制作を行うほか、地域社会と関わるアートプロジェクトなどを通して、多領域での造形表現の可能性を探っている。本展の出品作は、JAXA（宇宙航空研究開発機構）との共同研究のため、中原と井上が共同で行った実験をもとにしている。二人は、2001年にパラボリックフライトにより作られる約20秒間の微小重力環境を利用して、人間の身体的リファレンスを、「箱に入る」「ボールに抱きつく」などの方法により実験し、映像に収めた。また、そうした環境下で身体の外と与えるプロトタイプとしての箱やブランケット（「ライナスの毛布」）、また人型や抱き枕のようなクッション型の実験的オブジェも制作した。これらの実験的な作品は、地球環境（重力下）で育成された人間の身体、ひいては未来の人類の身体についての考察へと導くだろう。本作は、「生存のエシックス」（京都国立近代美術館、2010年）に出品された。

## 中村竜治 Ryuji NAKAMURA

1972年長野県生まれ、東京在住

中村竜治は、建築のほか、美術館でのインスタレーションや展示スペースのデザインも手掛けている。中村の作品には、細かな細部でできた確かな構造を持ちつつも、空気に溶け込んでゆくような非物質性を感じられる。座る人を宙で受け止める雲のような椅子、確かな体積はあるのに重量をまったく感じさせない模型には、特別な意味は与えられておらず、観るものはかたちや質量に集中して、粗と密、虚と実の間で心地良く宙吊りになる。1999年、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修士課程修了。2000年から2003年にかけて、青木淳建築計画事務所勤務。2004年、中村竜治建築設計事務所設立。「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」（東京国立近代美術館、2010年）、「ミラノサローネ」（2012年）に映像作家の志村信裕と参加のほか、「グッドデザイン賞」（2006年）、「JCDデザインアワード金賞」（2009年）など受賞多数。

## 中谷美二子 Fujiko NAKAYA

中谷美二子は、1970年の大阪万博ペプシ館で、高圧噴霧器で発生させた「霧の彫刻」をはじめ制作。これを機に、ビデオ作品に加えて、世界各国で「霧の彫刻」を発表する。中谷は本作を、環境に呼応して刻々と変化する「生きた彫刻」と呼ぶ。「霧の彫刻」は、わずかに1〜2℃の温度変化で、膨大に立ち現れ、たちどころに消滅する。可視と不可視の狭間に存在する霧は、身近な風景をたちまち異世界に変え、そこに立つ者は雲の中のように自然と交歓し、また浮遊感を伴った身体感覚を味わう。中谷の霧は、自然と人工、可視と不可視といった、二項対立的な領域における相互の浸透、融合、循環のダイナミズムを意識させる。本展では、谷口吉生設計による美術館2階の大池周辺に霧を発生させる。恒久設置作品に「霧の森」（昭和記念公園園子供の森、1992年）、「グリーンランド氷河の原」（中谷宇吉郎雪の科学館、1994年）、「霧の彫刻」（岡崎美術博物館、1996年）など。「横浜トリエンナーレ」（2008年）、高谷史郎との二人展「雲霧林」（山口情報芸術センター、2010年）、「第18回シドニー・ビエンナーレ」（2012年）など、世界各地で活躍。

## エルネスト・ネト Ernesto NETO

1964年リオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）生まれ、現在同地在住

エルネスト・ネトは、柔らかで伸縮性のあるライクラやコットンなどの布を用いて、鑑賞者の身体と空間が有機的な関係を結ぶ作品を制作する。身体についての考えは、ネトの作品の中で常に重要な位置を占めており、個別の身体や社会性を超えて、宇宙論、存在論のスケールに及んでいる。本展では、当館のコレクションである《わたしたちのいる神殿のはじめの場所、小さな女神から、世界そして生命が芽吹く》（2006年）を展示する。その名のとおりに「小さな女神」の形をしたテント状の作品に入ると、花や生命体を連想させる有機的な形体が散らばっており、そこでラベンダーの香りに包まれながら、天井から差し込む光の粒子が身体に浸透し、外側に向かって拡散していくような感覚を得る。それはいわば生命の誕生する胎内のような空間である。「第49回ヴェネツィア・ビエンナーレ」（2001年）、「第24回サンパウロ・ビエンナーレ」（1988年）、個展「リヴァイアサン・トト」（パンテオン、2006年）、国内では個展「エルネスト・ネト」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2007年）ほか。

## 奥村雄樹 Yuki OKUMURA

1978年東京生まれ、ベルギー在住

奥村雄樹は、美術家であり翻訳家でもあるという珍しい肩書きを持つが、両者の活動は「主体の入れ替え可能性」、また「ありうべき並行世界」という点で通底している。翻訳または通訳を扱う作品としては、《ジュン・ヤン 忘却と記憶についての短いレクチャー》（東京藝術大学、2011年）、《河原温の純粹意識 あるいは多世界（と）解釈》（「14のタベ」東京国立近代美術館、2012年）、《知らないことを思い出す（芸術家の幽霊）》（「MOTアニュアル2012」東京都現代美術館、2012年）等があり、いずれも主体の揺らぎ（もしくは憑依）、また異なる世界の重ね合わせが多重的に現れる。これらの作品では、作品の本質を様々に引き出し、またありえた別の可能性を探るため、他の作家の作品に再解釈を加える手法を取っている。本展では、缶詰のラベルを内側に貼り宇宙全体を梱包したとする赤瀬川原平の《宇宙の缶詰》（1963年）をもとに、缶詰制作のワークショップを行い、そこに「世界の果て」や「内と外」をめぐる宇宙物理学者や哲学者のインタビューが重なる。その映像と、ワークショップの参加者の数だけある宇宙の缶詰による《多元宇宙の缶詰》は、一方に缶詰の中身を食べ、半田付けするという極めて日常的な光景、他方に私たちが確かに属している宇宙の途方もない大きさや寿命が語られることで、今一瞬の人間の生や身体が巨視的な視点により相対化される。

## 佐藤克久 Katsuhiko SATO

1973年広島県生まれ、現在愛知県在住

佐藤克久は、学生時代は油画専攻に籍を置くも、2006年頃までは絵を描かず、日用品や身近な素材を用いたコンセプチュアルな彫刻やインスタレーションを展開していた。2001年9月11日、同時多発テロの映像を見て、日常の中の道具（飛行機）によって世界を変えてしまう可能性があるという価値観に疑問を感じ、それとは違う方向を模索し絵画制作をはじめた。山のような輪郭を持ちながらもタータンチェックの柄が描かれた半立体の作品や、カラフルなグラデーションに木や星座、また猫の頭部が描かれた絵画など、具象とも抽象ともつかない、既存の表現分野や形式に収斂されない平面作品を発表してきた。いずれの作品も、例えば子供のブロック遊びのように、無の状態まで導かれた思索の痕跡が形や色彩となって残る。そして《ぼっかり》や《あてどなく》といったタイトルのように、そこに豊かで詩的な無意味の真空状態が現れる。1999年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻を修了。「放課後のほらっぱー櫃田伸也とその教え子たち」展（愛知県美術館・名古屋市美術館、2009年）、「リアル・ジャパネスクー世界の中の日本現代美術」展（国立国際美術館、2012年）、個展「さひつつかうとさ」（児玉画廊|東京、2013年）。

## やくしまるえつこ Etsuko YAKUSHIMARU

相対性理論、やくしまるえつことd.v.dなど数多くのプロジェクトを手がけ、ボーカル、作詞、作曲、プロデュースなどを務めるほか、美術館での展示や画廊での個展、パフォーマンス、センサーを用いたオリジナル楽曲のプロデュースと演奏など、ボーダーレスな活動を行っている。メディアアーティストとの共働によるプロジェクトやWEB展開される作品も多い。やくしまるの声や楽曲は、クリアでリズムカル、かつユーモラスな独特の浮遊感があるが、意図して機械が発するような精密さと冷たさを兼ね備えている。歌詞はシンプルでコミカルだが、韻や謎を含んだ練られたものであり、宇宙物理学の知識に基づく言葉が散見される。やくしまるは、そのすべての活動において、同時代性を孕みつつ、自身の実在性、非実在性と、自由に軽やかに戯れているようである。展覧会に、個展「ミオデソプシア」（タリオンギャラリー、2012年）、「LOVE展：アートにみる愛のかたち」（真鍋大渡+石橋素+菅野薫との共同制作、森美術館、2013年）など。また「アートアクセスあだち：音まち千住の緑」（2012年）にて朗読パフォーマンスを行っている。

# 広報用画像申込書



Toyota  
Municipal  
Museum  
of Art  
豊田市美術館

## 「反重力 浮遊 | 時空旅行 | パラレル・ワールド」展

2013年9月14日(土) - 12月24日(火) 豊田市美術館

以下の画像を広報用にご提供いたします。

ご希望の方は下記をお読みのうえ、画像にチェックをいれていただき、メールまたはFaxにてご連絡ください。

Fax: (0565)-36-5103 / Email: [bijutsukan@city.toyota.aichi.jp](mailto:bijutsukan@city.toyota.aichi.jp)

### 〈使用条件〉

- 画像は展覧会および美術館の紹介のみにお使いください。使用后、画像データは消去してください。
- キャプションは、作家名、作品名、制作年、(場合によっては)所蔵先等、クレジットを必ず表記ください。
- 作品画像のトリミング、文字のせはご遠慮ください。
- データを第三者に渡さないでください。
- 情報確認のため、お手数ですが校正紙を担当者へお送りください。また掲載物を一部美術館にご寄贈ください。
- 読者様・視聴者様へのプレゼント用招待券の手配も可能です。ご希望の際は申し付けください。

お問合せ：豊田市美術館 展覧会担当/能勢陽子、北川智昭、鈴木俊晴  
〒471-0034 愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1

Tel. 0565-34-6610 Fax. 0565-31-4983

<http://www.museum.toyota.aichi.jp> Email: [bijutsukan@city.toyota.aichi.jp](mailto:bijutsukan@city.toyota.aichi.jp)

貴社名：

ご依頼者氏名：

ご住所： 〒

Tel：

Fax：

E-mail：

掲載物・放送番組名：

種別 (○印をつけてください)

雑誌 新聞 TV ラジオ フリーペーパー ネット媒体 携帯媒体 その他

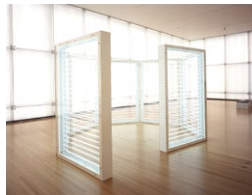
発行・放送予定日： 年 月 日 ( 時 分 ~ 時 分 )



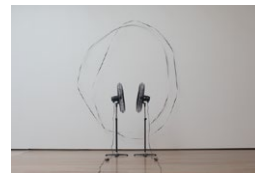
a. レアンドロ・エルリッチ  
《家》2004年  
サンキヤトル(パリ)でのインスタレーション



b. 平川紀道  
《irreversible》2011年  
豊田市美術館蔵



c. カーステン・ヘラー  
《ネオン・エレベーター》2005年  
豊田市美術館蔵



d. ジルヴィナス・ケンピナス  
《ビヨンド・ザ・フアンズ》2013年  
豊田市美術館蔵



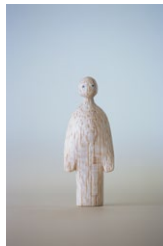
e. クワクボリョウタ  
《10番目の感傷(点・線・面)》2010年  
©2010 Ryota Kuwakubo, photo: Keizo Kioku, photo courtesy: ICC



f. 松澤宥  
《80年問題—傾く宇宙》2002年  
豊田市美術館蔵



g. 毛利 武士郎  
《Mr. Aからのメッセージ 第3信》1996年  
豊田市美術館蔵



h. 内藤礼  
《ひと》2011-12年  
photo: Rei Naito, courtesy: Gallery Koyanagi



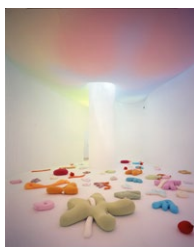
i. 中原浩大+井上明彦  
《パラボリックフライトを利用した微小重力体験飛行における実験》2001年



j. 中村竜治  
《豊田市美術館のためのインスタレーション(仮)》2013年



k. 中谷芙二子  
《Living Chasm - Cockatoo Island》2012年  
第18回シドニービエンナーレでの展示風景、  
courtesy: the artist, photo: Prudence Upton



l. エルネスト・ネット  
《私たちのいる神殿のはじめの場所、小さな女神から、世界そして生命が芽吹く》2006年  
豊田市美術館蔵



m. 奥村雄樹  
《多元宇宙の缶詰》2012年  
blanClass(横浜)でのワークショップ、  
photo: ©2012 blanClass, Kosuke Hatano,  
courtesy: the artist and MISAKO & ROSEN



n. 佐藤克久  
《リアル・ジャパン 世界の中の日本現代美術》(国立国際美術館)での展示風景、2012年  
photo: Kazuo Fukunaga



o. やくしまるえつこ  
《やくしまるえつことd.v.d.-Guruguru Earth》2011年